始めから終わりまで

そろそろ半袖ではいられなくなってきた近頃、ここ三日間は雨に降りこまれていた。

私は褐色の紙ばりの傘をさし、家路についていた。革の靴なんて高価なものは持てなかったし、長靴も持っていなかった。そのため私が所有している薄汚れた布ぐつ、元は白かった乾いた泥にまみれた靴では、外を出歩けなかった。それで仕方なく木製のサンダルを季節外れではあるが、履いていくしかなかったのである。

長袖のシャツにズボンとサンダルといういかにも貧相な出で立ちで玄関を出ると、たちまち足は濡れ（当たり前だが）ズボンの裾に泥水がじわじわこみ上がってきてしまった。足先がだんだん冷たくなるのを、ズボンの張り付く不快感を我慢しながら、やっとのことで銀行から今月の給付を受け取ってきたのである。その上、銀行内は長蛇の列、床はびしょぬれときて、思惑通り私は足を滑らせ、軽く腰を打ってしまった。良い恥だ。みすぼらしく気の弱そうな、真っ当に教育を受けていないであろう男がすてんと転ぶ様は滑稽を通り越して同情を誘うこと間違いなしだっただろう。

住宅の並ぶ坂を上り（この辺りは小山が集まっていて銀行がある駅の周辺は、ちょうど谷底に位置している。）右へ左へ入り組んだ住宅街の奥へ進んでいくと、数ある小山の一つのてっぺんにたどり着く。ぐるりと周りを家屋で囲まれたその場所には、狭い階段が一つだけ降りていて、その先には右側に平屋、正面に木造アパート、左側に白い鉄筋コンクリート造の小さなマンションが待ち構え、行き止まりとなっている。三つとも古い建物で、正面は貧民、右には平民、左は懐古趣味の小金持ちが住む決まりになっている。まあ、私が勝手にそう思っているだけなのだが。

私は真ん中のアパートに今年の夏から寝泊まりしていた。駅から徒歩十五分ほどの道のりは、ほとんど坂を上り下りすることに費やされ、運動をしない私は息も絶え絶えでひいひい、付け加えて悪態をつきながら駅との間を往復しているのである。

最後の山を登りきり、階段に足をかけた時、足首まで水に浸かっていることに気が付いた私は、わざと長い溜息を漏らした。階段は小川と化していた。行き場をなくした雨水が勢いよく階段を下っていた。

ズボンは一本しか持っていなかった。明日までに乾くだろうか、そうでないとしたらどれくらいの時間がかかるのだろうか。このどうしようもない湿度の日々で。私は明日からいよいよ数日の間、下着姿で部屋に閉じこめられ、そこから指一本覗かせることも禁じられてしまうのだろうか。

雨はさほど強くなく、寧ろおとなしいほどであったが着々と街の水かさは増していた。しかし私は水かさについてはどうでもよかった。洪水など都会で起るはずがないと確信していた。都会とはそういうものだ。なにもかもきっちりと整備されている。

階段の下は幸い大した水たまりはできていなかった。地面は水分を含んでおり、歩くと嫌な音がしたし、サンダルと足の裏を泥が包み込みはしたけれど。

私は玄関の引き戸を開けた。しかしすんなりと事は運ばない、引き戸は立ち入る者を拒もうと

する、私は容赦なく嫌嫌をする戸を力ずくで開け放つ、建て付けが悪いのだ。
　アパートとはいっても、この家の一室を間借りしているようなものだった。一階は共同の台所に便所、冷蔵庫。食卓はなかった。風呂は在るにはあるが、私のような部屋を借りている人々（あと三人いる。）は使用を禁止されていた。大家は住んでいないから、誰が使うために、一体なんのためにあるのかわからない風呂である。食事は自炊するにしても自室にもっていって食べる。当然、食器も食材も自分で買いそろえねばならない。食卓がないのはありがたかった。私たちには食卓を囲むなどという習慣は無用だ。隣人を愛さず憎むわけではないが、おはようございます、こんにちは、こんばんは、それで事足りた。
　家具のない、だだっ広い居間の真上、台所の反対側から続く階段を上ると間借り人たちの玄関が、ここまできたら襖でも良いような気がするが、正面玄関は引き戸なのだし、けれども扉なのである。扉が四つ、廊下を挟んで交互に並んでいてどの部屋もちゃんと窓際に面している。
「ただ今戻りました。」
私は管理人に告げた。管理人は階段裏にある（格子窓が取り付けられていればどことなく役所然として、それらしく、在りもしない威厳も保てたのだが。）背の低い番台とでもいおうか、木製の囲いの中ですやすや昼寝をむさぼっている。
　私は、この五十過ぎであろう丸刈りの男が目を覚ましているところを、週に一度しか見たことがない。だから挨拶など気休めにしかならない。この白髪まじりの男、太ってきているのではないかと最近思う。俯いたあごが二重になって、私がここに越してきた夏頃より頬の肉がたるんでいるのである。
　私は癇に障る管理人のいびきをなるべく無視するよう努め、受付を横切ろうとした。
　踏み出した足のなんと重いこと。床板の軋みの代わりに聞こえてきたのは、川に石が投げこまれた音と全く同じであった。ああ、なんという災難。由緒正しき木造アパートは大雨により浸水していたのである。雨はふくらはぎの半ばまで積もりに積もっていた。雨漏りしているのだった。わたしのズボンは、まったくもってもう取り返しがつかなくなっている。水滴がつむじめがけて落ちてくる。どんな隙間だろうと通り抜ける水を感じる。これじゃあ靴が革だろうとゴムだろうと布だろうと木だろうと関係ないじゃないか。
　私はさらに意気消沈して、もちろん驚いてもいたが、管理人を起こす気も怒鳴りつける気も失せて、床にざざ波をたて、湿った不気味な足音をたてて、重い足取りで、スキップはせず、岸辺になっている階段を上っていった。
　廊下は湿ってはいるがどうやらいつも通りの廊下だった。照明はなく、突き当たりの窓から射す弱い陽光だけが頼りだった。夜になると、自室の扉を開けたまま通らなければ、階段から盛大に転げ落ちてしまう。長いこと住んでいる他の隣人たちは、明かりがなくともそれこそスキップしてでも一階へ降りられるみたいだが。
　私の部屋は一号室で突き当たりの窓を正面に、左側の一番手前、階段を上りきるとすぐの扉にある。早々に疲れきった私は鍵を乱暴にさしこみ、ドアノブを回してやっとのご帰還となった。
　勢いよく背後で扉が叫んだ。私の悪い癖の一つである。思わず唸り声を出してしまった。というのも自室も見事に水浸しであったから。書きかけの書類が水面に浮かんでいた。唯一の鞄、青

っぽいチェックの厚ぼったい鞄も、水底で美しく揺れている。本棚に並べられた読書の歴史たち（私が生命を所有している証でもある。）も無惨に水浴びを楽しんでいる。布団を敷きっぱなしにせず、押し入れにしまっておいたことが今のところ考えられる唯一の救いだろうか、そう思うようにしよう。

畳の目がよくわかる。雨水は濁りなく澄んでいる、汚い部屋だというのにか。さてどうしたものか。鉛筆やペンや滲んだ書類や。私の大事な、つたない絵画の数々を、二日前に脱ぎ捨てた下着などを。網でさらって適当な場所に干すべきか。しかしこの天候ではいかなるものも乾燥などしない。適当な時期ではない。カビが生えるのがおちだ。あり得そうにもないが、苔が生えるだけまだましというものだ。個人的には苔の方が好ましい。素手ですくい上げるしかない。今までの全生活の賜物を。

私は先ず鞄に手を伸ばした。しかし残酷にも私は足を滑らせて、我らが溜め池に倒れ込んでしまったのだ。雫の弾ける音。（その部分からは？）意外にも、ぐっと底が深くなっており、足が畳につかず頭まで浸かってしまった。自分の髪の毛が重力を忘れ、自由になおかつ優雅に踊りだすのがわかった。水中は仄暗く、目を開いていても痛いばかりで光の屈折でもちろんぼんやりとしか辺りは見えない。なぜ水中眼鏡を用意しておかなかったのだろう。そんな物はとうの昔に捨ててしまった。

視界が悪い中、海藻もどきが揺れている姿をなんとか認識できたため、得意の泳ぎでその生活必需品を引っ掴み、遥か高みのかつて私の部屋だった水面に向かって突進した。

夕日が沈み、部屋の電気を灯して一、二時間ほど経った時。隣の部屋で物音がした。水のはねる音。やはり雨漏りに苦心しているのは私だけではなかったようだ。しかし少し間をおいて、男と女の話し声、そしてくすくす笑い。

やっかいだなと私は舌打ちした。隣の三号室には若い女が住んでいるのだ。地味でぱっとしない、可も不可もない（私が言えたことではないかもしれないが。）容姿の女は、向かい、二号室で暮らす頬の痩けた男と頻繁に寝ているのである。お互いの部屋を行き来していて、二号室に女が訪ねていく場合はまだ良いが三号室に男がやってくると、なにもかも彼らの身体的な秘密もすべてが壁を通して忍び込んできてしまう。きっと彼らは今、二人だけの海岸で特別にロマンチックな一夜を過ごしているつもりだ。そんな夜は誰も歓迎していないのに。

私は私で書き物机の小さな浜辺で、文字が洗い流された書類の解読と書き直しに挑んでいた。どの紙類も湿っている。ペン先を紙に触れさせればたちどころに黒い染みが広がり穴が空く。それは不毛であり途方もない試みではあったが、書類には何者にも代え難い、つまり私自身の人生の一切が記されていたのだった。過去も未来も。ただし現在だけは常に記されていなかったが・・・。

書面から読み取れるのは、歪んだ『チ』と『ヨ』と『ち』と『よ』だけになってしまった。蝶々が一体どうしたというのだ。

座布団を沈ませ、尻に敷いて、半身が水に浸かったまま私はこの世で最も重要な仕事をしているのにあいつらときたら。色狂いめ。色情魔めが。

私はボールペンを水たまり及び波打ち際に投げつけ、心ゆくまで水しぶきを浴びると自室から逃げ出した。
つかの間の上陸。木のサンダルはごとごとと仰々しい叫びを羅列する。浜辺を歩く際に土足か素足かなんて当人が決めれば良い。むしろ靴を履いていた方が硝子の破片や珊瑚の死体に足を切らなくて済むから安全だろう。
自室の蛍光灯の示す道筋を頼りに、また女がハイヒールをならして階段を上り下りするように、居間へ下りた。私は歯ぎしりを密かにしながら（何故なら苛立っていたから、そうする権利ぐらいあるだろう。）腰まで水位が上がった四角い海を進んで、番頭を睨みつけた。渋面の男はまだまだ眠っている。彼のシャツは腹の肉で今にもはちきれんばかりだ。回転椅子の背もたれは、刻一刻と増え続ける男の体重をうけていじらしく反り返っている。
居間は夜の不確かな帳と静かなざざ波といびきと無音の雨垂れと・・・私の歯ぎしりのみが存在していた。台所の蛍光灯は趣がないな。閑散とした光だ。地味で、つまらない。細長い二本の白い棒、そこから垂れ下がる手垢じみたスイッチを引く紐さえ。私は辺りを不安そうに見渡した。

翌日は週に一回開催されるお楽しみ会の日だった。雨は最早降っているかどうか皆目見当がつかない。ただ、灰色がかった朝日の末端で住宅街は大洪水により巨大な渦を巻いていた。あの世からやってきた耳を聾する轟音が所構わず密集していた。私は自室の書き物机の前から窓を通してその一部分を目にした。まあそんなことはどうでも良いのだ、なんてったって都会なのだから。昨夜は一睡もせず蝶々以外の解読に没頭していた。遂に滲んだ言葉は戻らなかった。これで私の人生はあっけなく白紙となった。あらゆる経験の数々！誇り高い私の偉業たちは消滅した。私は貧相で惨めな男に完全に成り下がったのだ。銀行で素っ転んだまぬけな中年男。愛嬌さえない。未来さえも更に過去さえも失って私はなにを基準に、指標にしてこれからを生きればよいのだ。もうこの紙切れは教えてくれない語りかけてこない。単なる紙くず。くずかごに丸めて入れておこう。
さて、絶望の淵で執り行うお楽しみ会である。お楽しみ会は居間で行われる。私たちはお昼前までには、一階にずぶ濡れで集合しなければならない。もう横になれる心の余裕も浅瀬もなかった。間借り人はそれぞれ目のしたにくまを作って、いくらかよろよろしながら位置につく。
管理人を起こしてやる。
「水曜日ですよ。」
彼はあごまで淡水に浸食されている。私たちは体温を奪われ震えている。四号室の女がくしゃみをした。くしゃみは色気も可愛げもなかった。彼女は四十になっているはずだ。そろそろ自分を飾ろうという気が失せてくる年頃である。そうして残るのは金切り声だけだ。
管理人はすっかり肉に埋まった目を開いて、蒼白な顔の四人を認めた。
若い女と頬の痩けた男はいやらしくお互いの身体を密着させて、いやらしく微笑み合っている。
私は慇懃に回転椅子を押して、太り過ぎで水中さえも満足に歩けなくなった管理人を定位置まで運んでやった。

「管理人さんは一人じゃ動けないので私が椅子を押して進みます。」
と高らかに宣言する私。他の四人は頷いただけだった。（管理人の背後に立っているので彼の顔は見えない）
　私たちは一列に並ぶ。台所の反対に立ちはだかる壁に向かって。壁はずいぶん遠のいている。水曜の祝祭の日にだけ、居間は五十メートルの長さまで伸びる。伸びる瞬間は誰も目撃したことがない。雨水は依然澄んでいる。遠からず青緑に輝きだしそうだ。
　おもむろに私たちは走り出す。しかし雨の海に浸かっていては中々難しい。が、着実に私たちは超人的な力で速度を上げる。壁に向かって。激しい水音との戦い。この時ばかりは染みだらけの面白味のない壁が私たちの目標に成り変わる。私たち五人はこのような儀式を毎週欠かさず行っている。雨水という障害物は初めて加わったものだが、水曜日にこうして、走っている。太古や神には知識も教養も興味もないが、これは儀式なのだ。
　波が立つ。徐々に辺りは明るくなる。雨は去ったのだろうか。太陽が顔をのぞかせたのだろうか。しかし私たちは最早もの凄い速さで床板を蹴っている。もがいている。駆け抜けている。泳いでいる。
　終着点がいよいよ近づいてきた。壁はからっと乾いて白くペンキで塗り直されている。清潔だ。きらめいている。どことなくスペイン風だ。それからどうやら壁には亀裂が走っている。
　私たちは急停止した。壁を目の前にして。みんな膝に手をついてあえいでいる。
　すると誰かの足音がする。青緑に光ろうとする水面から目を離して、顔を上げた。五足の靴が見えた。靴は亀裂の上をなぞって移動している。亀裂は真横から見た階段であった。それらは革靴だった。私は革靴の足音が好きだ。図々しくなくて、感じがいい。（私の木のサンダルときたらいちいち怒鳴りつけられるようだ。）黒二つ茶色三つ。そして五人の見知らぬの男たちが一列に下りてきた。眼鏡をつけた男、髪の長い男、坊主頭の男、背広の男、背の低い男。
「兄さん。」
管理人が突然叫んだ。彼は椅子から立ち上がろうとしたが膝が体重に負けてしまった。管理人は顔を歪めると椅子に崩れ落ちた。大きな石が川に沈んだ。
　長髪の男が私たちに近寄ってきて朗らかに笑った。
「兄さん。」
今度は震えた声。管理人は赤ん坊のようにしなびた両手を差し伸べる。あの男が彼の兄らしい。
　長髪の男は、管理人の方へ歩み寄ると身を屈め、抱擁した。太った五十の男は大人げなく涙を流した。
　高波が打ちつける爆発音がした。それに怖じ気づいたのか、一瞬にして雨水は逃げてしまった。これが愛というものだ。凄まじい。残った雫は絶妙に小気味良いリズムを刻んで滴り落ちた。輝きながら。雲が退散していく。太陽が今年最後の熱い眼差しを私に向ける。カモメが鳴く、のではなくて烏と雀が鳴く。兄が愛想良く笑う。
　ここで映像が止まる。固まった笑顔と私たち。後から聞いた話では、管理人の兄は大昔、若くして死んでしまったのだそうだ。私といえば銀行での失態を深く恥じている。私の人生はどこへ行った。私の人生を、返しておくれ！

おわり

一夜明け、私の精神体験とその後の行動について

http://p.booklog.jp/book/83347

著者：大きな水
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ookinamizu/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/83347

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/83347

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ